

タイトル	自然とのつながりを芸術はどう捉えてきたか
氏名 (所属)	笠原広一 (アート・コミュニケーション・デザイン)
ホームページ	http://www.alpha-net.ne.jp/users2/ctc50s50/
キーワード	自然、芸術、アースワーク、農民芸術論、持続可能性、感性、交歓性
アピール文	環境教育に必要なもの。それは現在の世界に生きる私たちの感性の覚醒ではないでしょうか。芸術の視点から自然や環境をどう美的に捉え直すことができるのか。これまで自然環境をテーマにした芸術作品や芸術思想にはどのようなものがあるのかを紹介します。芸術による環境教育のイメージを広げてみましょう！
要旨	<p>芸術における自然環境の描写は、神々の世界、高貴なる人々の背景、そして市民の暮らしの場である身近な風景、へと変化してきた。そして 19 世紀後半には、画家の内なる眼によってそれぞれに捉えられ描き表された自然が生まれてきた。しかし 20 世紀にはいと、労働や産業による人間の抑圧から、人間と自然のつながりといった全体性を考える動きが出てきた。そして、そこに芸術をとおして考え表現しようとする取り組みが、わずかだが生まれてきた。そうした事例をみながら、芸術による自然とのつながりを見ていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・芸術と持続可能性の問題について 当団体では、地域で芸術文化活動に取り組む中で、これからの日本がどのように共生社会をつくっていくか、持続可能な社会づくりができるかが、芸術としても不可避のテーマであることがわかってきた。その背景となる芸術についての当団体に関連するこれまでの活動を紹介し、今なぜ、芸術が自然環境との関わりを重視すべきなのかをお話しします。 ・宮沢賢治における自然・農業と農民芸術論 宮沢賢治は、農業をとおして人間が自然との交歓を基に、祈りや宗教、祝祭や芸術によって生活がつけられていくことに、人間のあり方や生き方の可能性を求めた。彼の童話にある生き物が互いを生きる糧とする関係は、命の連鎖であるとともに生物多様性といった自然や環境に対する視点を宗教的なテーマから描いたとも言えるだろう。 ・ヨーゼフボイスの社会彫刻としての拡張された芸術 ボイスはそれまでの絵や彫刻といった芸術作品制作のイメージを大きく拡張した。一人一人が社会をよりよいものにつくっていく営みを、社会彫刻として捉えた。そのために行う人々との対話そのものを芸術としての営みと考えた。また、100 万本の樫の木を植えるプロジェクトでは、石の彫刻作品をつかって設置するのではなく、街中に木を植え、何十年もかけて緑の彫刻を育てていくことを芸術活動として行った。 ・アメリカを中心にしたランドアート、アースワーク ロバートスミッソン、ゴールズワージーといったアーティストたちは、木や石といった自然素材を使った作品をつくり、芸術の取り組みを自然環境にまで拡張させた。能動的・積極的な自然環境と芸術の関係性の模索が行われた時代である。 ・近年のアートプロジェクトと自然 2000 年代に入って持続可能な人間と自然の関係を模索する動きは、芸術表現にも表れてきた。とりわけワークショップやプロジェクトなどの、人々の協同による取り組みは、環境教育との親和性が高い。環境教育のために芸術が何かをするというよりは、アーティストは、独自の視点や感性で活動を行っているのだが、そこにみられる自然との関わりにみられる感性、楽しさやおもしろさ、人々とのつながりを生み出すようなアクティビティなど、環境教育においても有効なアプローチが沢山あるのではないだろうか。

●京都・環境教育ミーティング 事例紹介エントリーシート●

※以上の内容は、京エコロジーセンターのホームページで公開されています。